

沼津市 若山 牧水 記念館

第77号 令和8年9月15日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 <http://web.thn.jp/bokusui/>

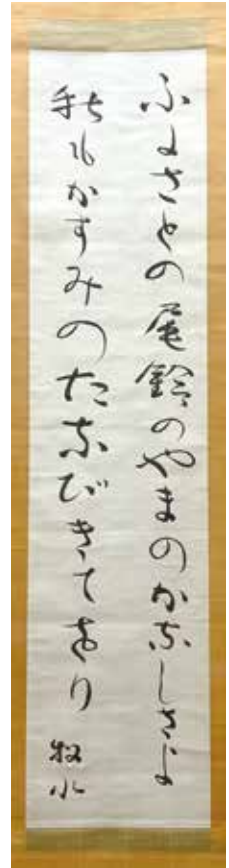
ふるさとの尾鈴のやまのかなしさよ
秋もかすみのたなびきてをり 牧水

第六歌集『みなかみ』巻頭の一首である。この歌を含んだ「故郷」一三四首の中から三首ひく。

母が飼ふ秋蚕あきこの匂ひたちまよふ家の片すみに置きぬ
机を
いづくにか父の声きこゆこの古き大きな家の秋の
ゆふべに
憎まれ者のわれに媚びむとするところにやわが部屋
に鏡台を置くといふ姪

明治四十五年五月に喜志子と結婚。新生活を始めたばかりの七月に郷里から父立蔵危篤の報を受け慌てて帰郷した父の病気が思ったほどではなかったで、すぐにも上京したい気持ちがあった牧水だが、父母や親戚から、村または延岡や宮崎あたりで何かの職業を見つけるようにと迫られた。なかなか都合のいい就職口が見つからず、やきもきする父母や親戚たちを前に牧水はほとんど沈黙を続けているうちに、父の病気は次第に快方に向かってきつつあった。

この頃の牧水は、二階の自室の机に向かって本を読んだ



り、自宅裏にある巨石の上に登って真正面に見える尾鈴山を眺めたり、寝転んで本を読んだりしていた。巨石には現在、掲出の短歌が刻まれている。少しずつだが、歌も出来はじめていた。

春になったら牧水と共に上京し、大きな病院をいろいろ見に行きたいと話していた父立蔵だが、病状が急変して大正元年十一月十四日、六十八歳で永眠した。こうなってしまうと、直後に開かれた親族会議では、絶対家にとどまって母親の老後を安心させるようにと牧水に迫ってきた。そんな親族からの要望もあり、一度は妻を呼び寄せ郷里で生活することを考えた牧水だが、やはり何としても郷里を出て東京に行くことを考え始めた。何とか母や親戚を説得して、上京の手はずを整え、大正二年五月十四日に出発。途中、愛媛県岩城島の三浦敏夫を訪ね、しばらく滞在したのち、明石、神戸、大阪、京都、浜松を回り東京に着いたのは六月十七日であった。

東京で留守を守っていた喜志子は、牧水不在の間に妊娠していることがわかり、信州松本の実家に身を寄せ、大正二年四月二十四日長男の旅人を出産した。喜志子と旅人が牧水と一緒に生活をするまでには、牧水帰郷から一年ほどかかった。

尾鈴山は、宮崎県都農町と木城町にまたがる標高一四〇五、二メートルの山で、坪谷の牧水生家からは右手寄り（南南西）の方向にある山で、清らかな溪流と「矢研の滝」や「白滝」をはじめとした大小三十を超える滝があり昭和十九年国内で初めて「尾鈴山瀑布群」として名勝地に指定されている。

若山牧水と四人の子

江戸 雪

若山牧水の三冊目の歌集『別離』（明治四十三年発行）には

波白く断えず起れる新秋のときほき渚に行
かむとぞおもふ

といううたがある。渚に繰り返し起る波の凄烈さに憧れ、いつかそこに行く未来を想像している。恋人や故郷との離別の苦悩からの逃避や沈鬱というよりも旅を愛する者の開かれたところがある一首だ。

旅を愛した若山牧水が、二十八歳で授かった一人目の子を旅人と名付けたのはよく知られていることだ。また、旅人が生まれた後、妻の喜志子の病氣療養のため神奈川県三浦半島の北下浦にしばらく住んでいた頃に長女が生まれた。海と親しんでいた牧水は、その子を見さきと名付けた。さらに、東北・関西・北関東などへの旅に出かけ自然を全身に享受した時期に生まれた三人目の子は真木子。静岡県沼津において富士山を眺める生活を始めた頃に生まれた末の子は富士人である。このように牧水は、そのときどきに自らのこころを占めているものを子に名付けてゆく。そ

んなエピソードはまさに牧水のまつぐな性格を物語っている。見栄え良く飾り立てたり、濁った思惑などはいっさい持たない精神の証明だと改めておもう。

ここではそんな四人の子へ牧水がどのような視線を向け、どのように詠ったのか、順にうたを読みながら考えてみたい。

我が赤児ひた泣きに泣く地もそらもしら雲となり光るくもり日

『秋風の歌』（大正三年発行）
膝に泣けば我が子なりけり離れて聞けば何にかあらむ赤児ひた泣く 『秋風の歌』

連作「夏の日の苦悩」には、初めての子育ての驚き、よろこび、そして戸惑いが詠われている。一首目の「地もそらもしら雲となり光るくもり日」は面白い表現だ。さながら天地がひっくりかえるような心持ちということだろうか。次のうたでは、抱いているときに膝の上から聞こえる泣き声は確かに我が子のものだが、離れた場所から聞こえてくるそれは少し違って聞こえるのか、「何にかあらむ」という。含みのある表現ながら笑ってしま

いそうになる。と同時に、児の生を直感的に感知しているのだろうと想像した。「何にかあらむ」と表現してしまう牧水の正直さに親しみを感じる。

妻や子をかなしむ心われと身をかなしむ
ころろ二つながら燃ゆ 『秋風の歌』
あはれ身は生きものなればこの如く移らふ
ころろとどめかねつも 『秋風の歌』

連作「さびしき周囲」より引く。子を持つまでは「われと身をかなしむ」ことに占められていたころとは別のもうひとつのころろが現れ、どちらも「燃ゆ」のだという。親になつたばかりの戸惑いが露わに詠われており、二首目においてはその変化を受け入れるほかないと覚悟を決めている。いきなり眼前に高い解像度をもって広がる現実を、「生きものなれば」という言葉で把握しようとしている過程がまた直感的で面白く、妙に納得する。

風吹けば吾子が頬ぞ染む茜さしころろ昂
るか吾子が頬ぞ染む

『朝の歌』（大正五年発行）

二人目の子、みさきが生まれた頃のうた。「頬ぞ染む」の繰り返しに子を愛おしむ気持ちがかこめられる。三浦半島ならではの冬の冷

たい風を受けてか、頬が真っ赤になる子らを詠うにも「こころ昂るか」という独白が挿入され、子に向ける独特の視線が印象的だ。

疲れはてて帰り来れば珍しきもの見る
ごとくつどふ妻^{つまこ}子^こら

『さびしき樹木』(大正七年発行)

父の眼^めのつめたき光^{ひかり}うつつなき児^こにも
わかるか見ればさびしげ『さびしき樹木』

これらのうたでは旅人とみさきも四歳と二歳くらいになり生まれた頃の驚きや戸惑いは薄れた頃だろう。子との関係、ひいては家族のありように気持ち^{きもち}が傾いてゆく。生活は豊かとは言えず、さらに旅に出ることの多い父である自分への子らの視線を気にかけている。「珍しきもの見るごとく」とは少し大袈裟な表現だが、不安な気持ちの現れと読めばいいのだろう。二首目の「児にもわかるか」では、幼子と言えど一人の人間として子と向き合っているように感じる。親子もまた一対一の人間同士、大事に可愛がりながらも眼差しには尊厳があり、この世のさびしさを分け合う存在として子を見ているのだ。また、大正七年に出した『溪谷集』は旅のうたが多いなか、伊豆から家族に向けた

たのしみで出でて来しかど^{たの}しみてけふ
居るものとゆめなおもひそ 『溪谷集』

かきいだき吾子^{あこ}と眠れる癖^{くせ}つきてをりを
りおもふその吾子がことを 『溪谷集』

といううたもあり、旅に出ていても妻子のこととは忘れることなく寂しんでいること、家族をかけがえのない存在として心に留めていることを直に伝えようとしている。

やがて三人目の子、真木子が生まれたのち大正九年八月に静岡県駿東郡楊原村上香貫折坂、富士山を望む場所^{みど}で暮らし始める。

香貫山^{かぬきやま}いいただきに^{あこ}来て吾子とあそび久しく居れば富士晴れにけり

『くろ土』(大正十年発行)

牧水は沼津の居宅から近い香貫山に親しみをおぼえ、移住して一ヶ月後にこのうたを詠った。旅人、みさき、真木子がそれぞれ七歳、五歳、二歳となった家族でこの山に登り穏やかな時間を過ごしたことだろう。しばらく遊んでいると空が晴れてきて、姿を現した富士山を感動しながら眺めている様子が伝わる。このうたの歌碑の建つ香貫山の見晴らしの良いい場所へは、沼津を訪れた際にわたしも車で連れて行ってもらった。歌碑に向かつて立つと奥に富士山が見え、すばらしいロケーションだった。

はるかなる声にしきこゆ庭にいでて呼
びかはしあそぶ妻^{つまこ}子が声は

『山桜の歌』(大正十二年発行)

沼津に住み始めて初めての正月を迎え、庭に遊ぶ妻子たちが呼び合う声を聞いている。「はるかなる声にしきこゆ」から、牧水は部屋で書きものでもしていたのだろうか。愛する富士山の見える居宅での幸福な生活が垣間見える。かつて泣き声を「何にかあらむ」と距離感をもって感じていたことを考えると、子との生活にも慣れ、安らぎを感じているようだ。そしてまもなく家族がもう一人増える。次男、富士人の誕生だ。

「四月二十六日次男誕生、富士人と名づく、今までになき可愛ゆさを覚ゆるも早や父となりはてし心からにや。」という詞書をつけて、「吾子富士人」という連作八首を作っている。

貧しくてもはやなさじとおもひたる四^よ人^{にん}目^めの子^こを抱^{かか}けはかほゆき 『山桜の歌』
吾子^{あこ}いまし睡^ね入るとすらし泣声のかすけくなりて守唄きこゆ 『山桜の歌』
四人目の末のみづこのとりわけてかはゆしおのれ病^{やま}みがちに^いして 『山桜の歌』

生活の苦しさゆえに子はもうなせないとおもっていたが、おもいがけず授かった末の子を抱けばそれまで以上に愛おしく感じる。二首目は、やがて寝入ろうとする幼子の泣声

小さくなるにつれ妻の子守唄の声が聞こえるようになった。そんな時間のうつろいを一人かみしめ、自らの生き様を内省しているようだ。三首目では、心身が弱りはじめた自分は末の子が何歳まで生きていられるだろうと案じているのだろうか。「みづこ」は生まれて間もない子のこと。瑞々しい存在をおもわせるこの言葉と、下の句の「おのれ病みがちにして」とが哀しく響きあう。

吾をよぶ吾が子の声のわびしさよをちこちに啼く百舌鳥ききれば 『山桜の歌』

庭に來ている百舌鳥の声に耳を傾けていると、父を呼ぶ子の声が聞こえてきて何ともわびしい気持ちになったという。このうたでは、身体と心が密接に関係しているようにおもえる。「吾をよぶ吾が子の声のわびしさよ」は、幸福のなかにわびしさを、哀しみの奥に輝きを人いちばい感受し、それを真つ直ぐに言葉にする牧水らしい表現である。

ひとつ気づいたことがある。このうたをはじめ、牧水は子育ての場面において妻子の声に耳を澄ましている。この世に慣れず泣き続ける声、庭に遊び互いに名を呼び合う声、そして母の子守唄に安堵して眠りゆく泣声、さらに百舌鳥の声にまじって吾を呼ぶ声。どの声も独自の感慨をもって詠われ、そのときど

きの牧水にとつてかけがえのない存在であったことがわかる。父・牧水は正直な愛情を子に伝えようとしていたのである。

若竹の伸びゆくごとく子ども等よ真直ぐにのばせ身をたましひを

『黒松』(昭和十三年発行)
うつくしく清き思ひ出とどめおかむ願ひを持ちて今をすこせよ 『黒松』

晩年には「やよ少年たちよ」九首を残している。この題からも分かるように、自分の子へというより将来を担う子どもたち全般に向けたようなうたが並ぶ。未来にむけて希望にふくらむような大らかさと力強さを湛えた一連である。一方で「若竹の伸びゆくごとく」「うつくしく清き」といった言葉は、やや教訓的でもある。もちろん、こうしたうたを日本の子どもに残したい気持ちも痛いほど分かるのだが。

牧水が最晩年に詠んだうたを最後にあげてみたい。

ぬぎすてし娘が靴にでで虫の大きなる居り朝つゆの庭に 『黒松』
机なる栢榴ゆびざし見飽きなば賜べよ 喰べむと吾子の言ふなる 『黒松』
ゆくさきざき嫌はれてゐしわんばくのひと日も終りいま眠りたる 『黒松』

留守居する子等うちつどひたうべゐむ
その桃の実を父もたぶるよ 『黒松』

一首目。朝、子が脱いだままにしている靴に入っている大きな「でで虫」を見つけた。驚くだろう娘の顔を、少しいたずら心をもって想像しているようだ。次の二首では、栢榴を見つけると食べたいとせがみ、わんぱく過ぎて友と喧嘩ばかりしては眠ってしまう子を微笑ましく眺めている。さらに四首目。旅先で旬の桃を食べながら、留守番している子らもきつと食べているだろうという確信がどこか楽しい。これらのうたにこそ牧水の正直さがあり、読むほどに深く読者のところに沈んでいくことだろう。

「筆者プロフィール」 えど ゆき



昭和四一年、大阪府生れ。大阪市在住。短歌同人誌「西瓜」同人。平成一三年、第二歌集『椿夜』で平成一三年度咲くやこの花賞、第一〇回な

がらみ現代短歌賞受賞。そのほかの歌集に『百合オイル』『Door』『駒鳥(ロビン)』『声を聞きたい』『昼の夢の終わり』『空白』『ガーディガン』。令和八年二月二八日に開催した第三八回「雛の歌会」に、講師としてお越しいただいた。